

陸上部 大活躍！



男子走幅跳優勝 嶺村鴻汰選手

9月5～7日に行われた第83回日本学生陸上競技対校選手権大会(通称日本インカレ)に出場し優勝を勝ち取った三人をお話を伺った。日本インカレは筑波大学陸上部が大きな目標として掲げる大会の一つである。そんな今大会について主将である嶺村鴻汰選手(体育4年、長野・大町高)は「陸上部としては出場する選手もそうではない選手も全員が男女ともに総合優勝するという目標を共有し、個人ではキャプテンとしてチームに勢いをつけるという意識で挑んだ」という。女子は総合優勝し、男子は総合第3位という好成績をベストの状態ではない中で修めた。

嶺村選手は走り幅跳びで優勝を掴んだ。6月の日本選手権では優勝したものの、狙っていたアジア競技大会の代表選手に選ばれず悔しい思いをした。しかし今回の日本インカレで優勝を果たしその強さを改めて証明した。大学卒業後も競技を続け、国際大会を狙って頑張りたいと語って下さった。筑波大OBの今後の活躍が見逃せない。

松原選手(体育2年、奈良・橿原高)は七種競技で優勝、4×400mリレーに出場し優勝。「日本インカレは大学生の最高峰の戦いで、女子の六連覇への思いと自分を今まで応援してくれた人への感謝の思いを持って挑んだ」という。七種競技とは、100mハドル・走高跳・砲丸投・200m走・走幅跳・やり投・800m走の七種の競技を二日間に渡り行う競技である。練習は3種目に分けて行うそうだ。松原選手は「私は投擲が苦手。得意な走種目で差をつけることで苦手をカバーしている」という。しかし、七種もの競技をこなす体力と器用さがあってこそ優勝である。今後の抱負は「国際大会にも出るような年上の選手にも負けないように努力して、多くの人に応援してもらえたい」と語る。

松原選手が出場した4×400mリレーは最終日の最後の種目であり、出場選手全員が応援席に立ちチーム一丸となつて応援したという。嶺村選手は「インカレで応援席に立つ最後だったが、4年間で一番チームがまとまって応援していた印象だった」と語り、試合の盛り上がりがあった。



(篠原美奈巳)

筑波スポーツ

平成26年11月4日(火)
第159号

題字:中山雅史氏
(元サッカー日本代表・蹴球部OB)





ロシアのチャリヤンスクで行われた世界柔道選手権大会。世界の強豪が集うこの大会に、日本を代表して筑波大学の永瀬貴規選手(体育3年・長崎・長崎日本大学学園)が挑んだ。個人戦では5位と、悔しい結果に終わったが、団体戦では金メダルを獲得。日本の窮地を救う活躍を見せ、チームに大きく貢献した。永瀬選手が戦う81kg級は世界選手権、五輪でのメダルが長らくなく、日本の鬼門と言われる階級である。81kgは外国人にとっては平均的な体重。そのぶん競技人口も多く、強い選手も多い。

個人戦では準々決勝で破れ、敗者復活でのメダルにしかつたが、3位決定戦でも昨年度王者の前に敗退という結果に終わった。永瀬選手は「一番の目標は個人で金メダル。だから個人5位という結果は悔しかった」と振り返る。準々決勝は指導3つによる優勢負けだった。相手は世界ランク1位のチリキシビリ。「相手に先手をとられ、常に受けに回ってしまった」ことが敗因だったという。ルールが改正され、積極的な攻め姿勢を出し続けなければ、すぐに指導が入るようになった。日本の目指す「一本をとる柔道」に伴うリスクも大きくなったと言えらる。こういった影響も少なからずあったのかも。しかし永瀬選手はこの敗戦を決して無駄にはしなかった。迎えた団体準決勝。クルシア

との試合で見事にチリキシビリにリベンジを果たしたのだ。「個人戦が終わって、対策が甘かったと反省した。しかし、その後団体まで修正し、個人での負けを活かしたことは、自信になる」と話す。この切替えと修正は、今大会の大きな収穫だろう。これで日本は決勝に進み、ロシアとの大一番を迎えた。決勝では、地元応援を味方につけたロシアに予想以上の苦戦を強いられる。個人戦で日本勢が優勝していた66kg級、73kg級でまさかの連敗。後がない状況で中堅、永瀬選手に回ってきた。永瀬選手はそのときの心境について「まさか前2つをとられた状況で回ってくるとは思ってなかった。で、正直焦りはあった」と振り返る。試合は両者一歩も譲らず、お互いにポイントを取らせない堅い展開に。残り27秒、相手の足技がかり勝負が決まると、思われた場面も、胸本で支え、どうにか持ちこたえた。これに負ければチームの負けが決まってしまう。日本代表として出ている以上、ここで諦めてはいけない」という思いだった。両者にポイントが全く入らないまま、延長戦へ。延長戦はゴルドンスコフ方式。指導つてもポイントが入ればその時点で決着がつく。緊迫した戦いだ。しかし永瀬選手は積極的な姿勢を貫いた。延長開始早々、大内刈りがきれいに決まり、文句なしの本勝ち。一度失いかけた

流れを(気に日本に引き戻したのだ。その流れのまま副将戦、大將戦を日本がとり、見事な逆転劇で金メダル獲得。やはり今回の日本の金メダルを永瀬選手の活躍なしには語れないだろう。まさに窮地を救う勝利だった。永瀬選手の強みは、得意の足技と、180cmの上背を活かした、相手の嫌がる柔道ができる所にある。国際大会の実質デビュー戦だった昨年のグランドスラム東京では、強豪を抑え優勝しているだけに、そのポテンシャルは計り知れない。今大会は自身初の世界選手権だった。永瀬選手は「12月のグランドスラム東京でしっかり結果を残して、来年の世界選手権では優勝したい」と話す。「選手としては、見ていて面白い、楽しい」と思われるような柔道をしたい」とうた。個人では、自分の良さを活かせてもらえない悔しさを味わった。しかし団体では、チームに勝利で貢献し、頂上を取るの経験は、永瀬選手をひとまわりもふたまわりも成長させているはずだ。そう考えると、81kg級が日本の「鬼門」ではなくなる日も、そう遠くないかもしれない。(藤原真梨子)

編集長 鈴木優輔(人文2年)
会計 藤原真梨子(理工2年)
広報 岩佐拓哉(シス2年)
編集スタッフ 小峰素理菜(人文4年)
三浦加奈(理工4年)
島根崇志(国際3年)
篠原美奈(比文1年)
猪本あかり(比文1年)
高橋優太(シス1年)
松本 航(理工1年)
吉田健太(資源1年)

第6回

リレーコラム

筑波スポーツ新聞部に入ってから半年が経ちました。私がつくスポに入ろうと思ったのは、筑波大学にはトップアスリートを目指すすごい選手が沢山いるのに何も知らないのは勿体無いと思ったからです。実際につくスポの活動を見てみて筑波大の選手に驚かされてばかり。入学してから今まで蹴球部、男女バスケ部、男子バレーボール部などを観戦しました。どの競技も、男女かわらずスポーツ

を頑張る人の姿はかっこいいです。試合を観戦すると、感動するのと同時に刺激を受けて自分も頑張ろうという気になります。運動をすることは得意不得意があると思いますが、試合観戦は誰にでもできるし言葉が通じなくても感動できます。自分が応援しているチームや選手が勝つと隣にいる人が誰なのか関係なく一緒に喜んだりできるのがスポーツ観戦の魅力だと思います。私はみなさんに競技を選ばすい

ろいろなスポーツを見ることをお勧めしたいです。そのきっかけに筑波スポーツ新聞が役立つといいなと思います。スポーツが大好きな人が楽しめることはもちろん、スポーツが特に好きではない人が興味を持つきっかけになるような記事を書いていきたいです。(篠原美奈)

次は筑波編集委員の猪本あかりさんです。

発行所/筑波大学体育会 (TEL.029-853-2589)
発行人/吉澤 悟
編集/筑波スポーツ編集部 tsukusupo@hotmail.co.jp
責任者/鈴木優輔(編集長)

グーリー秋季

蹴球部 バスツアー 観戦記



秋晴れの10月12日、筑波大学蹴球部応援ツアーが開催された。

筑波大は現在関東大学サッカー1部リーグに属しており、ツアー開始時点で12チーム中11位、降格圏内にいるという厳しいチーム状況だった。このまま行けば戦後初めての2部降格を味わうことになる筑波大を後押しすべく、学内外、老若男女を問わず多くの人がバスツアーに参加した。

移動のバス内では、部員たちのトークや芸を楽しみながら、部の紹介ビデオで蹴球部について知ることができた。到着後は全員がユニフォームに着替え、青に染まった客席で応援歌の練習をして準備を整えた。

試合は序盤から激しい攻防が繰り返された。開始1



分、FW中野誠也選手(体育1年、静岡・ジュビロ磐田U18)が相手DFの裏へ抜け出し、GKとの1対1に持ち込むが、阻まれてしまう。その2分後、今度は相手のエースFWにゴールエリア付近まで突破を許しシュートを撃たれるも、DF早川史哉選手(体育3年、新潟・アルビレックス新潟ユース)が体を投げ出してブロック。緊迫した展開のなか、前半5分、早くも試合が動いた。左後方からのスルーパスに素早く反応した中野誠也選手がドリブルでDFをかわし右足を振り抜くと、ボールはゴール右上隅へ完璧な軌道を描いて吸い込まれた。先制された順天堂大は、ここから怒涛の攻撃を仕掛けてくる。筑波大はGK岩脇力哉選手(体育3年、三重・ジュビロ磐田U18)を中心に

体を張って防ぐも、16分、27分と立て続けに失点し、逆転を許してしまう。なんとか前半のうちに追いつきたい筑波大は40分、前線からのプレ

スをボールを奪い、混戦から中野誠也選手が再びゴールネットを揺らすも、オフサイドの判定でゴールは幻となり、1-2のまま前半が終了した。後半、リードされている筑波大は攻撃の中心である2列目の3人が流動的にポジ

ションチェンジしながら試合の主導権を握り、再三チャンスを作るも、なかなか得点に結びつかない。さらに後半43分、相手にワンチャンスをも

のにされ、1-3とされてしまう。残り少ない時間も攻め続け、後半48分によやめ途中出場の戸嶋祥郎選手(体育1年、埼玉・市立浦和)のミドル2人を報いるも反撃及ばず、2-3で試合は終了。ロングボールを蹴らずに繋いで攻める筑波大のスタ

試合には負けたが、さまざまな企画が用意されていて、また来年も参加したい。と思えるバスツアーとなった。まだ筑波大は関東2部リーグ降格の危機の中だが、来年のツアーが開催されるときのためにも、なんとか残留争いを勝ち残ってほしい。(松本航、高橋優太)



10月4日、つくばカピオにて第90回関東大学男子バスケットボール秋季リーグ戦、筑波大学対拓殖大学が行われた。

筑波大のホームゲームということもあり、多くの人が観戦に訪れていた。これに合わせるように男子バスケットボール部側も得点王予想や応援グッズ無料配布などのイベントを企画しており、まさに会場は筑波の応援色であった。

この応援にこたえる圧勝を期待したが、前半、筑波は苦しい展開を強いられる。第1クォーター序盤こそ先手を取り成功したが、その後は両チーム共に効果的に得点できない展開が続く。筑波大の攻撃も拓殖大ディフェンスを効果的に崩すことができず、外からの3Pシュートの成功もほとんど見られなかった。その中で筑波大は徐々に主導権を失い第2クォーターの中盤に逆転を許す。その後皆様の展開が続いたが、第2クォーター終了間際、ドリ



試合結果

第90回関東大学バスケットボール
リーグ戦(9月6日)

筑波大○92-68●専修大
筑波大○77-83●拓殖大
筑波大○92-79●国士館大
筑波大○86-88●法政大
筑波大○95-74●慶應大
筑波大○72-79●東海大
筑波大○74-64●明治大
筑波大○79-84●青学大
筑波大○68-61●白鷗大
筑波大○75-73●専修大
筑波大○66-51●拓殖大
筑波大○79-61●国士館大
筑波大○61-39●明治大
筑波大○80-67●青学大
筑波大○63-93●東海大
筑波大○90-79●法政大

第64回
関東大学女子バスケットボール
リーグ戦(8月30日、10月12日)

筑波大○61-68●早稲田大
筑波大○56-86●早稲田大
筑波大○70-69●拓殖大
筑波大○73-50●拓殖大
筑波大○62-82●白鷗大
筑波大○52-79●白鷗大
筑波大○63-65●松蔭大
筑波大○92-49●松蔭大
筑波大○97-76●順天堂大
筑波大○85-78●順天堂大
筑波大○57-61●医科大
筑波大○57-71●医科大
筑波大○65-105●専修大
筑波大○59-54●専修大

2014年度
秋季首都大学野球連盟
リーグ戦(9月7日、10月19日)

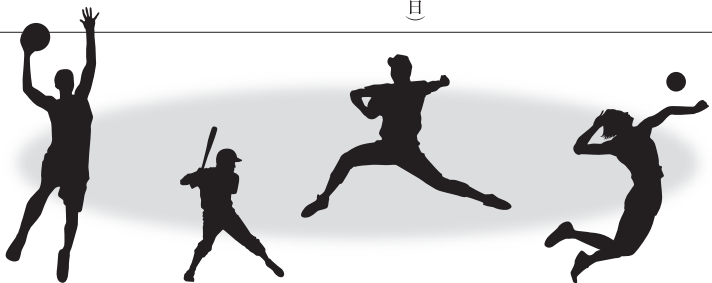
筑波大○5-1●東京経済大
筑波大○2-1●東京経済大
筑波大○8-3●城西大
筑波大○2-1●城西大
筑波大△5-5△独協大
筑波大○2-1●独協大
筑波大○1-5●東海大
筑波大○0-2●東海大
筑波大○6-1●桜美林大
筑波大○2-1●桜美林大
筑波大○4-3●日本体育大
筑波大○2-1●日本体育大
筑波大○1-0●帝京大
筑波大○1-6●帝京大

2014年度
秋季関東大学バレーボール
リーグ戦(9月6日)

筑波大○3-1●東海大
筑波大○0-3●中央大
筑波大○1-3●早稲田大
筑波大○3-2●順天堂大
筑波大○3-0●明治大
筑波大○1-3●日本体育大
筑波大○3-1●慶應大
筑波大○0-3●東京学芸大
筑波大○1-3●専修大
筑波大○2-3●法政大
筑波大○1-3●国士館大

2014年度
関東学生バレーボール連盟
秋季リーグ戦女子1部
(9月13日、10月12日)

筑波大○3-0●嘉悦大
筑波大○2-3●青山学院大
筑波大○3-0●国士館大
筑波大○3-1●日女体大
筑波大○1-3●日本体育大
筑波大○1-3●東海大
筑波大○3-0●宇都宮大
筑波大○1-3●日本体育大
筑波大○1-3●東海大
筑波大○3-2●青山学院大



関東甲信越大会特集

2014

硬式テニス部



8月18日、19日に行われた関東甲信越大学体育大会のテニス競技において筑波大硬式テニス部が男女ともに団体優勝を収めた。今回は硬式テニス部を代表して元主将の伊藤雄選手(体育4年、神奈川県・相模大野、チームを代表して大川彩夏選手(体育

3年、新潟・長岡高)にお話を伺った。
硬式テニス部の活動は月曜、金曜がオフの週5日間、監督による指導の下、上級生を中心に練習を行っている。
この関東甲信越大学体育大会にはどのような意識をもって臨んだか伺うと「関甲

信は目標を男女優勝とし、9月のリーグ戦の前の団体戦でチームとしての力を高めることを意識した。またこの大会は部の主力メンバーが抜けて比較的下位のメンバーが中心であったため、試合に出る機会を生かし経験を積みたいという意識で臨んだ」と大川選手は語る。
「女子は準決勝の決勝進出がなかったダブルスの試合が重要だった。途中まで追い込まれていた苦しい試合だったが男女含めチーム全体の応援と選手の頑張りによって勝つことができた、その勢いで決勝も勝ち抜くことができた」と勝負所であった場面を大川選手は語る。
男子は「決勝戦で相手が粘り強い試合をしてきたためどの試合も競ってしまつたが、その競った場面を先に2つ勝

ち切れたことがよかった」と伊藤選手は話す。
今後に向けて伺うと「男子はリーグ戦を三部リーグから二部リーグに昇格するという素晴らしい形で終えており、来年からは一部リーグでの戦いになるので厳しい試合になっていくが選手たちは冬場の練習で体力をつけて気持ちを強く持って頑張ってもらいたい」と伊藤選手。「女子はリーグ戦を一部リーグ6位残留で終えたが目標は一部リーグ優勝であったため来年はさらに高みを目指していきたい」と話す。



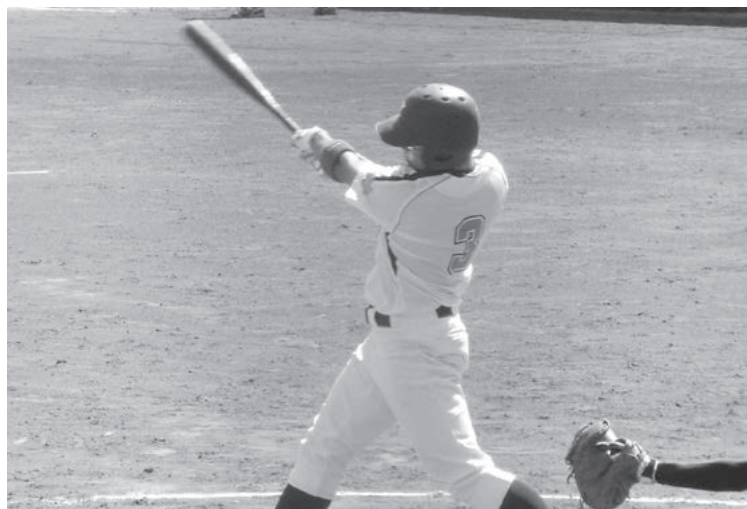
体操部

8月の後半に行われた第63回関東甲信越大学大会。我々が筑波大も参戦し、多くの種目で好成績を残した。今回はその中でも、個人、団体ともに優勝を果たした体操競技部を直撃。大会に主将として臨んだ、當間栄伸選手(体育3年、沖縄・那覇国際高)にお話を伺った。
今大会では、個人では表彰台を独占、団体でも優勝と華々しい成績を残した体操競技部。しかし、當間選手は決して明るくはない表情で、大会を振り返った。話を聞くと、チーム内で最上級生となる3年生は、自分を含め二人だが、調整不足のまま、大会に臨むことになったと言った。「頼りになる存在にならなければならなかったが、申し訳ない試合をしてしまった」と、當間選手。一方で、2年生が皆強く、安定した演技を披露したとのこと。団体戦はとくに後輩に助けられた結果になった、と話してくれた。



た。そのまま次のあん馬でも失敗してしまい、主将失格だと痛感した。相当落ち込んでいたようだった。それだけ主将の重圧が大きいのだったのだろうか。「気持ちを切り替えて臨んだ吊り輪からは大きなミスもなく、良い演技ができた。しかし、チームとして優勝は成し遂げられなかった。自分は複数の種目で失敗してしまっている、悔しい結果としては大会4連覇を果したが、その表情は曇っていた。「難しい演技をしてミスをしたら意味がない。チームとしても、勝てるだろう」と思っても、気を抜かない雰囲気を作ることが大事。少しのミスも許さない、完璧な演技を目指していきたい」上級生が存分に力を発揮すれば、更に規模の大きな大会での表彰台も期待できそうだ。一糸乱れぬ体操競技部の演技に、これからも目が離せない。(鈴木優輔)

準硬式野球部



先に行われた関東甲信越大会において準硬式野球部が見事優勝を果たした。この大会について主将の川崎浩浩選手(比文3年、岡山・岡山宮高)にお話を伺った。
春季リーグ以降この関東甲信越大会までにチームとして磨きかけた部分は「打力のレベルアップ」であったようで、「春の関東大会や春季リーグはどちらかといえば守り勝つ野球で戦ってきた。しかし、春季リーグでは失った点数を跳ね返すことができなかった試合が多く、打力の必要性を感じた」と川崎主将は話す。その打力のレベルアップを証明するかのうちに、この関東甲信越大会では行われた3試合すべてで5得点以上を記録した。その打力の向上に大きな役割を果たしているのが1年生の存在であるようだ。現在、1年生のうち3人が試

合に出場している。「1年生には長打力のある選手もおり、それによって打線に厚みが出ている」と主将も認める活躍ぶりのようだ。「春季リーグではまだ上手く新1年生と上級生を組み合わせて戦うことができていなかったが、関東甲信越大会では1年生も含めて、いい形で戦うことができた」と話してくださった。また、関東甲信越大会前と後ではチームにも良い変化が起きているようで「チームとして落ち着きが出てきた。1年生からも練習中に声が出るようになり、野球について先輩後輩が言い合える環境ができた」とチームの雰囲気にも手ごたえを感じている様子だ。
最後に今後の目標について伺うと、「今回の優勝は今年度初のタイトル(優勝)なので嬉しいが、あくまで1番の目標はリーグ戦。3年生はもうすぐ代替わりになるので集大成として秋季リーグでいい結果を残したい」と力強く話してくださった。今大会の優勝を自信として、秋季リーグでの活躍を大いに期待したいと思う。(岡崎純豊)

